

古書古人 (4)

小宮山楓軒叢書について

丸 山 季 夫

小宮山楓軒の名は、ただに水戸学の研究者ばかりでなく、幕末文化史に意を注ぐ人たちにも、必ず見聞に入るものである。楓軒は、水戸藩士、諱は昌秀、字は子実、はじめ酒造之介、のちには次郎衛門と称した。立原翠軒の門人で、史学者として多くの編著を残して、天保11年3月2日75才で没した。略伝と著述の大要は、清水正健著『水戸文籍考』(のち増補『水戸の文籍』)によって知られる。また、伝記に森銚三氏の「小宮山楓軒」が最も詳細であり、「水戸の人物に関する雑話」には、小宮山叢書中の『楓軒紀談』が引用されている。史料として、小宮山叢書が紹介されたのは、これが最初であろう。

楓軒の編著の多く蔵されているのは、国立国会図書館の小宮山叢書608冊であろう。つぎが静嘉堂文庫の小宮山楓軒叢書138冊であろう。慶応義塾大学図書館には、高橋箒竜旧蔵の『楓軒稿』6冊があり、大阪大学には『楓軒文稿』がある。前者は森氏の論考中に報告されている。内閣文庫には『楓軒文書纂』95冊がある。

楓軒の著述を問題にする時、注意す

べきは小宮山叢書で、これは明治42年に遺族から帝国図書館に寄贈された由緒あるものであり、楓軒の主著は、この稿本によらねばならない。これを補なうものとして、小宮山楓軒叢書をここに紹介し、研究者の利便に供しようと思う。

小宮山楓軒叢書は、各冊に「小宮山氏収蔵図書」の所記があって、やはり小宮山家から出た本ではある。これは多くの蔵書中より抜いて叢書を作り、叢書名を与えたもので、小宮山叢書は主著が多いに対し、これは翠軒関係が多い。楓軒の編著は次の4点である。

楓軒偶記 6冊

静嘉堂本は他写であるが、自筆の書入れがある。小宮山叢書本は自筆本、宮内庁本も自筆であり、三者異同がある。『日本隨筆大成』所収本の底本は宮内庁本である。内容は、文化4年より7年にいたる4年間の聞書雑録。

西游雑誌 3冊

第1巻欠。寛政5年、翠軒に従い関西を歴遊した時の記事。文政7年写。

西游筆録 2冊

下巻末に「右宮西游所筆録今屈括既三十年、是歳再写聊記歲月備遺忘、文政五年夏五日 楓軒小宮山昌秀識」。

小山観音寺記 1冊

古河城下の小山観音寺に関する、小出信左衛門との往復書簡と文書の編集書。

以下楓軒宛書簡。

竹斎手簡 6冊

『古河志』の著者小出翠庵書簡。

間宮槐亭手簡

間宮土信の書簡。

島友政手簡 上・下 2冊

二本松の人成田頼直の書簡。文政9年より天保3年にわたる。

翠軒のは、全て楓軒の手にかかったものである。

翠軒先生手簡 1冊

読書覚書、伝聞書留。例せば「シヨメイル蘭書翻釈、加賀ニ而申付ラル、平三郎話、宇田川玄晋、越後宗臣、吉田長淑(三十人ふち、銀二十枚)、藤井芳程、大高玄哲、皆加州臣」。頭書の朱註は楓軒筆。

臨池談・臨池余言 2冊

翠軒の翰墨談。卷末に、楓軒の「文政六年癸秋七月」の識語がある。

操觚余言 2冊

「文政甲申春三月」の識語がある。

郷党遺聞・附録 2冊

楓軒識語「文化十二年四月写之」。

燃犀逸史 1冊

平家遺孫事跡等史の逸聞。卷末に楓軒の書簡あり。

追遠四考 1冊

楓軒識語「文政甲申夏五月会八日」

温泉行記 1冊

寛政5年塩原、享和3年鹿島、文化3年熱海などの遊記。

仏事考 1冊

楓軒識語「文化三年丙子十月十一日終功」。

此君堂漫筆 3冊

千慮一徳 2冊

見聞書留、資料多き隨筆。

翠軒先生手簡 2冊

文化5年5月以降、書物に関する記事多く。

以降は、翠軒宛書簡。

艾峰手簡 2冊

翠軒宛吉田篁墩の書簡、「文政元年十一月二十九日の写畢」。

蒙斎手簡 2冊

卷末に「右藤叔蔵貞幹与柴野栗山文化十年秋八月此君堂本、小宮山昌秀」。

諸家手簡 4冊

尾藤良佐、柴野栗山、屋代弘賢、鍋田晶川、橋本経亮、伴蒿蹊など翠軒あて。天保九年の識語がある。

柴野栗山手簡 1冊

卷末に、文化8年の楓軒の識語あり。

以上、楓軒、翠軒の著書、関係書物を略説したが、これ以外は、ほとんど楓軒の写にかかっているものであり、その個々の書名は静嘉堂文庫の目録または、『国書総目録』をごらんいただきたい。多くは、楓軒の識語が認められており、伝記研究の資料となろう。楓軒の蔵書目録は茨城県立図書館に所蔵されているが、それに当ててみる必要もある。両叢書間の関連も、今後の宿題であろう。改めて考えてみたい。

(まるやま・すえを 静嘉堂文庫司書)